

## 第8回

### ここらへんで繁殖のお話し(その8 分娩の準備のおはなし)

(有)シェパード 獣医師 松本大策

今年は積算気温が低く稲の分株が悪かったり、台風や大雨の影響を受けたり、でイナワラが少ないようです。とはいうものの、この国で利用されているワラはほんの少力で、例年500万トン程度が鋤き込みや焼却(最近は公害問題で減ってはいるものの、やはり2万トンほどは焼却されているとのことです。)されています。

たしかに国産ワラはキロ単価が高いです。しかし、イナワラを使わず、輸入乾草のみ与えている肥育農場では、イナワラのみ給与していた頃の1.5～2倍の粗飼料を食べています。それを考えたら、輸入乾草の2倍の価格のイナワラでも経済効果は変わらないことになります。まして、イナワラ給与と同じような食欲安定や肉質安定は輸入乾草では難しいことを考えたら、少々高くても国産イナワラを使う価値は十分あります。国産イナワラを利用することで、ただでさえ低いこの国の食糧自給率を上げるという効果もあるのです。

## 母牛の繁殖のお話し 8

前回まで発情から排卵、受胎してからの子牛の成長について考えてきました。今月は、いよいよ分娩の準備のお話しです。

### 分娩前にやっておくこと！

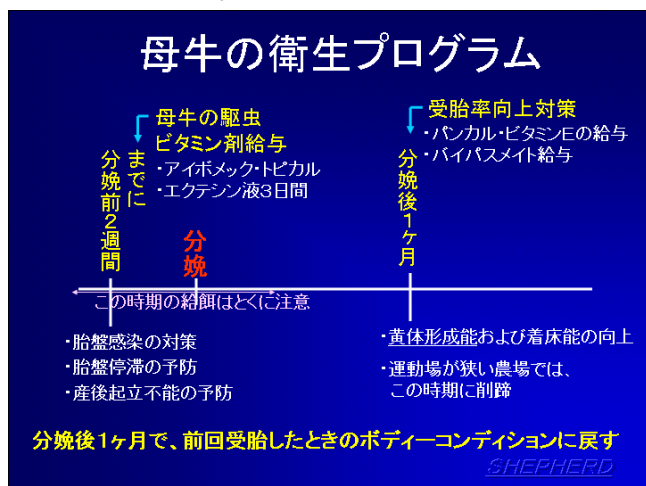
お母さん牛は、分娩に伴っていろいろなストレスにさらされます。体の中のホルモンのバランスは分娩を境に大きく変わりますし、お産自体もかなりの体力を使います。また、すぐに泌乳を開始しますから、体脂肪の動員や骨からのカルシウムの溶出も必要になります。また、お産したあとの子宮はつねに細菌感染の危険にさらされています。さらに、分娩開始の引き金を引くのはお腹の赤ちゃんが出す副腎皮質ホルモン(コルチゾール)は、免疫抑制作用も持っています。

いろいろ書き出すと、本当にお母さんって大変なのですね。久しぶりに「かみさんを大切にしなくっちゃ」と思いました。

こういういろいろなストレスからお母さんを護るために、飼い主さんも準備してあげなくちゃいけないことがあります。まず、分娩舎(小規模経営の場合は分娩室ですね)の消毒。だって、お産で子宮内や産道が傷ついている上に、赤ちゃんの副腎皮質ホルモンの影響で免疫(ばい菌をやっつける力)も低下しているんです。分娩室からできる限りばい菌を少なくしておかなくてははいけません。臍帯炎(赤ちゃんのへソの腫れ)が多



発する農場ではとくにばい菌が多いので注意しましょう。消毒で、新生子牛の臍帯炎や敗血症死(ばい菌が赤ちゃんの血液の中で暴れて赤ちゃんが死んでしまう悲しい病気)も減りますよ。



つぎに、お産前1ヶ月から2週間のあいだにお母さん牛の駆虫をします。これは、胎盤を通じて子牛に伝染ったり、お母さんの乳房内に集まってミルクの中に子虫が出てきて子牛に伝染る「乳頭糞線虫」という凶悪な寄生虫を退治しておくためです。

さらに、お産の時のストレスと闘い、さらには分娩後の発情回帰を改善

するためにビタミンやミネラルも補給しておいてあげましょう。駆虫と一緒に時でかまいません。まず、乾草ばかり食べさせているお母さん牛は、ビタミンE(意外かも知れないけどビタミンAじゃないですよ)が不足しがちです。僕はビタミンE注 10ml+フォルテ5ml+パンカル注 10ml を筋注してあげることが多いのですが、ビタラップ63などの経口ビタミン剤を 50ml 程度与えてもよいでしょう。また、ビタミンDやカルシウムが不足していると子宮回復が遅れます。亜鉛が不足していると、子宮内膜炎にかかりやすかったり、分娩後の発情回帰が悪くなったりします。ドンハヶ岳ADEのようにビタミンD3や亜鉛・カルシウムなどを多く含むサプリメントも効果的です。

あと、お母さん牛が太りすぎているときに、つついお産前後に痩せさせようと考えがちですが、この時期に痩せさせるのは、脂肪肝の発生を招いて、分娩後の繁殖障害の原因となる場合があります。どうしても痩せさせないといけない場合は、パンカルG散などの強肝剤などを与えつつ、ゆっくりゆっくり痩せるようにしてあげましょう。

さて、このほかにも用意しておいていただきたい物があります。まず、ロープと滑車。これは難産の時に赤ちゃんを引っ張るため。それから赤ちゃんを吹いてあげる布とバケツ。さらに粉末初乳も用意しておくとう安心です。万が一お母さんの初乳が出ない場合、さらに恐ろしいことをいうと、お母さんが分娩事故で死んでしまった場合、粉末初乳さえあれば赤ちゃんは助けられますからね。

あと、獣医さんに予定日をお知らせしておけば、お酒を控えて待機してくださるかも知れませんよ(笑)。

